

2017年度 研修のまとめ

1. 研究主題と仮説

「ひびき合い、新たな学びを探究する子どもの育成」

～ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を通して～

仮説1	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業をすることによって、全ての子にとって参加しやすく、わかりやすい授業となり、習得と活用につながるのではないか。
仮説2	見通しをもって活動に取り組み、その活動を学びに結び付けるための話し合いや振り返りを行うことによって、主体的・対話的で深い学びにつながるのではないか。

2. 今年度の研究

- 1 理論研修で、話し方や聞き方に関わる「目指す子ども像」と、それを目指すための「複式の学習スタイル」（単式学級では「課題提示の仕方」）において共通理解を図り、授業実践の中で主体的・対話的で深い学びとのつながりを追究する。
- 2 ユニバーサルデザイン化した授業、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を計画・実施し、教職員で参観・交流する。
- 3 3年次のまとめをする

<具体的な重点事項>

昨年度の反省と研究計画第3年次を踏まえ、今年度は、以下の2点を重視した授業づくりを目指していく。

- 1 つ目…ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を基本とし、子どもの思考を「焦点化」させるため、教材研究の際に指導内容を精選すること、何を「視覚化するか」厳選すること、子ども同士の考えを、目的をもって「共有化」させることを重視した授業づくりをしていく。
- 2 つ目…児童が主体的に学べるよう、課題提示の工夫をすること（間接指導時の作業内容も含む）、対話によって深い学びになるよう、何を話し合わせるかを教材研究時に練ること、学んだ内容を振り返り、次時の学びへの意欲につなげることの3点を重視する。

以上を踏まえ、仮説に沿った授業をすることで、子どもたちが対話的に学ぶ「ひびき合い」と、主体的に学ぶ「新たな学びを探究する子どもの育成」を図ることができるのではないかと考える。しかし、上記の重点を全て盛り込んだ授業を1時間の中で展開するのではなく、その時間に学ばせることを焦点化したうえで、「学ばせ方」のポイントを授業者が絞るよう工夫する。

- ①導入時に、「考えてみたい」と思わせる課題と出合わせ、見通しをもたせる「課題意識重視」授業
- ②展開時に話し合い活動を取り入れる「対話重視」授業
- ③終末時に学習内容や学習過程を振り返らせたり自己評価したりする「振り返り重視」授業

「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れることを目的とするのではなく、単元や本時の目標を達成するために、取り入れた方が効果的に達成できるという時間や場面を見極めて取り入れていく方向で考えていく。

3. 研究のまとめ

① ユニバーサルデザインの視点を取り入れることにより知識の習得と活用は図れたか。

<まとめ>

- 特に ICT 活用等、「視覚化」の工夫により、誰もが参加しやすく分かりやすい授業となり、知識の習得と活用につながっていた。
- 「ユニバーサルデザイン」という言葉が一般化する以前は、「スモールステップ」のイメージの方が強く、「ハードルを下げた」誰もが越えやすい課題設定をすることに重きが置かれていた。しかし、「ユニバーサルデザイン」は、単に「課題を簡単にする」のではなく、理解が早い子、技能が高い子も「あれ？」と思えるような課題や「やってみたい」と思える、取組がいがあるものとなっていたため、能力差に関わらず知識の習得につながった。有効な手立てとなることがわかった。
- ユニバーサルデザインの視点は、特に学力的に低位の児童にとって知識の習得に効果的であると感じた。
- 算数科では、文章からイメージ化ができない児童に iPad など、視覚化、または視覚化したものを操作することにより、文章問題をイメージ化することができた。読解力の難しい児童にとって、導入段階として視覚化することは、その後の学習での知識の習得に有効であった。
- ユニバーサルデザインの視点を取り入れたことで、分かりやすい授業がなされていたとすると、少なくとも知識の習得は図れていたと思う。
- 少しずつではあるが、習得している。
- 「焦点化」については、導入の工夫により、児童の興味関心を高めることはできたが、興味関心＝知識・理解の向上につながらないこともあった。
- 「視覚化」については、大型モニターや具体物を用いた視覚化は有効だった。あとは、自ら図や絵にして半具体物として表現させたい。
- 「共有化」は、できていない。交流はできても対話による共有に至っていない。
- ユニバーサルデザインの視点により、能動的な授業には近づいたが、知識の習得は個人差が大変大きい。
- 「知識の習得」という点では、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることによって、それが達成できていたように思う。それが「活用」に結びついたかという点、個人的にはそこまで子どもの能力を引き上げることができなかった。

② 見通しをもたせること、話し合いや振り返りの活動によって、主体的・対話的で深い学びと なったか。

<まとめ>

- 単に「話し合いなさい」「振り返りなさい」という指示ではなく、何が導き出せたら良い話し合いなのか、何の観点を振り返るのかを指導することで、有意義な活動となった。低学年でも発達段階に合わせたテーマで話し合わせると、数ヶ月後にはより良い話し合いができていくと実感できるほど成長していた。
- 見通しをもたせることで、自主学習には主体的に取り組めるようになった。
- 振り返りは、本時の終わりと次時の導入で必ず入れるようにしているが、知識の習得だけでなく、見通しをもって課題に取り組むという点でも有効であると思う。自分の言葉（一言感想）にも取り組んでみたい。
- 基礎的・基本的知識や技能の習得があって、その上で主体的・対話的で深い学びにつながると思う。その意味で、見通しをもたせることや振り返りをしっかり行うことによって、基本的な知識・技能が身に付くのであれば、主体的・対話的で深い学びになっていたと思う。
- 見通しがもてると、児童の学習意欲が高まるので、導入の部分の興味のもたせ方で、その後の話し合い活動にもつながっていくことを感じた。
- 視覚化＝見通しをもたせる活動のつながりによって、「本時のねらいが何なのか」「次に何をしなければならぬのか」がわかり、そのことによって主体的な学習や知識の共有につなげることができていた。
- 国語では、最初にナンバリングなどを細かく、繰り返し、丁寧に教えることにより、文章を書くことが苦手な子どもも見通しをもちながら文章を書くことができていた。

- 見通しをもつことで自信をもって話すことができるようになった。
- 「主体的・対話的で深い学び」は「自分で学ぶ」、「みんなで学ぶ」「とことん学ぶ」という言葉に置き換えることもできると思うが、「自分で」「みんなで」まではわりとできていたと思うが、「みんなでとことん学ぶ」という面では、まだこれからという段階だと思う。
- 単元全体の見通し、1 単位時間の見通しをもたせることによって、子どもたちは目標・目的をもって学習できていたように思う。それに比べて、「話し合いによる対話的な学び」は、自分自身の反省も含め、まだ達成できていないように感じた。
- 話し合いは一方通行が多く、対話の訓練が必要だと思う。しかし、それ以前に基礎知識が不十分なため、対話の材料不足にも悩まされる。

③ 仮説以外の部分で、お互いの授業を見合い学べたこと、参考になったこと、今後に生かしたいことなど。

<まとめ>

- みなさん、それぞれ、授業準備が丁寧で、勉強になった。
- 見通しと振り返りがしっかりとなされていたこと。
- 構造的な板書構成であったこと。
- 研修の授業研以外でも日頃からの実践やその積み重ねを大事にしていることがわかった。特に子ども同士の話し合いの共有化や、ワークシートの活用の仕方など参考になることがたくさんあった。
- 今まで iPad を有効に使った学習を行ったことがなかったので、途別の先生方のアプリを使った授業はとても勉強になった。発表で活躍している「ロイロノート」、教科書を拡大して操作しながらモニターで共有する「TabletSync」、JICA 交流で活用した「Google 翻訳」、社会科の場所の理解に有効な「Google Earth」など。
- ・指示や発問は、助詞の使い方、言葉の選び方1つで、子どもの思考に大きな影響を与えることに改めて気付いた。
- ・子どもの声を生かした授業に取り組んでいきたい。
- ・今後に生かしたいことは、ICTの有効な活用。
- ・教材の大切さ、準備の大切さが改めて思い知らされた。

④ 「ひびき合い、新たな学びを探究する子ども」像に近づけることはできたか。また、そのアプローチ方法として、今回の2つの仮説は適切であったか。

<まとめ>

- 子ども1人で学習しているのではなく、友達とのかかわり合いがあるからこそ、理解の深まりや思考の変化があった。子どものつぶやきの中に「次はこんなことするのかな?」「こんなふうにやってみたい」という声があり、学習への積極的な姿勢が感じられた。子どもがうまくできないことを嘆くのではなく、仮説2つの視点でアプローチ方法を変えることの必要性を実感できたので、ベターな仮説だったと思う。
- 子どもたちの話し合いやペア交流での対話から「ひびき合い」の場面設定が、どの授業でも見られていたと思う。
- 3、4年生の学習では、ユニバーサルデザイン、見通しをもたせることがとても有効にできていて、「ひびき合い、新たな学びを探究する子ども」像に近づいていた。また、視覚化を通して子どもたちが目を輝かせて、次に何を勉強するのかをワクワクしながら受けている姿から、今回の2つの仮説が有効であったと感じた。
- 今回の研究主題に基づく校内共同研究は、新教育課程の趣旨を十分含んだ、優れた内容だったと思う。したがって、アプローチ方法も良かったと思う。
- アプローチ方法としては、適切だと思う。
- ひびき合うためのアプローチとして、ユニバーサルデザイン型授業は有効であると思う。
- 子どもたちが自ら考えようとしている姿や、友達と積極的に話し合っている姿を見ることができた。みんなが平等・対等に意見を言い合えたり、話し合ったり、アドバイスをしたり、受けたりしている場面がたくさんあり、素晴らしいと思った。大変お疲れ様でした。
- 適切であったと思う。コミュニケーションが苦手な子が多いので、ユニバーサルデザインは必要で

ある。

- 仮説としては適切であったと思う。「ひびき合い」については、互いに認め合い、学習するという姿は成果であったと思うが、新たな学び（とことん学ぶ）はもう一歩のところでしょうか。
- 新たな学びを「生活に生かす活用力」と捉えるのであれば、何かもう1つ手立てが必要だと思うが、「単元内の知識の習得」と捉えるのであれば、機能していると思う。ただし、基礎が十分身についた話であると思う。
- 共有化の中で、新たな学びがあったと思う。ただ探求にまでつながったかどうか。
- 「ひびき合う」というのが難しい。

【研修部まとめ】

「ひびき合い」（自分以外の誰かと学習する、1人では気付けなかったことに気付くなど）に関しては、「上手な」話し合いとは言えないまでも、友達と学習を進めていくことや、意見を伝え合うことが、授業の中で子どもたちにとって「当たり前に行うこと」という意識にはなったのではないかと。子どもたち自身も、自分は思いつかなかった考えが友達から気付かされる良さを実感できたと思う。

学んだことから、新たな学びを探究すること（こうなるとしても、条件が変わったら本当にそうなのか？次はこんな方法で試してみよう。など）は、毎時間そのような子どもの姿が見られるというのは、難しいことだと思う。しかし、時々表される「じゃあ、こういうこと？」というようなつぶやきや、「あ！わかった！」というひらめきなどに授業者として喜びを感じることもあったのではないかと。

説明を聞くだけの「受け身」な授業スタイルではなく、「主体的」な学びになるよう、私たちは日々取り組んできた。また、理想的な子どもたち同士の双方向な「対話」とならなくても、子どもが声を出して授業に参加する大切さは、日頃から感じているのではないかと。そういった意味で考えると、今回の3年に渡る研究はアプローチとして適切だったと考えられる。

より高次の学びとなるために、まずは「基礎基本」を大切と考えることも適切だったと思う。「基礎基本」を全ての子どもが身に付けるために取った手立て「焦点化」「視覚化」「共有化」のユニバーサルデザインの視点は、子どもたちの学びにとって有効であった。

「ユニバーサルデザイン」「アクティブ・ラーニング」に特化した研究はひとまず今年度で終わるが、日常的な授業実践の中で今後も意識して取り入れていくことが望まれる。